算数グループ学習における相互教授法の介入効果（3）

～児童の向社会的行動がグループの話し合いに与える効果～

○町 岳・中谷 素之
（大田区立東調布第一小学校）（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

I. 問題と目的

協同的な学習を促進する方策としてよく知られている相互教授法（Reciprocal Teaching；以下 RT；Palincsar&Brown,1984）の効果としては、学習面などの認知的側面に焦点を当たった報告が多い（Rosenshine & Meister, 1994）。例えば町・中谷 (2012) は、算数グループ学習（以下 G 学習）における RT 介入が、グループの学習関連発話の生成を促し、非学習関連発話を抑制することで、学習課題達成を向上させる効果があることを示した。一方、実際の教室内における協同的な学習場面では、例えば友だちとの関わり方といった、児童の社会的側面を、相互作用の質や学習効果に与える影響は大きいと予想できる。しかし児童の社会的側面の RT 効果への影響について、言及した先行研究は少ない。そこで本研究では、G 学習における発話の質と、その生成に関与する児童の社会的行動に焦点を当て、それらを事例解析的に分析する。

II. 研究方法

1. 調査対象と時期

都内公立小学校、5 年生 1 学級を対象とし、2011 年 11 月下旬に、「三角形の面積の求め方」の「自分で考える面積の求め方を話し合う場面」(20 分) に RT 介入による G 学習を実施した。

2. 手続き

G 学習では、児童が説明役・質問役に分かれ、順番に自分の考えを説明・質問した。発話データの採取に当たっては、4 グループを無作為抽出し、録画記録からトランスクリプトを作成した。

3. 事例解析的分析

高垣・田原 (2005) を参考に、町・中谷 (2012) で示された、RT 介入による G 学習の話し合いの特徴を、的確かつ端的に発表発話の集積を抽出し、発言を加えた（話者はすべて仮名）。

III. 結果と考察

学習関連発話が生成され、非学習関連発話が抑制されている発話の集積場面を抽出した（Table 1）。解釈に当たっては、児童の学習逸脱行動 (2・5・11) に対する、同グループ児童の行動 (3・6・13) に焦点を当たった。藤田の行動には、広井の G 学習への参加を促し (3), 非学習関連発話を抑制し (6), G 学習のルールに則った発話を促す (13) 意図があったと考えられる。これは、他者に対する援助や協力などの目標志向ある向社会的行動 (中谷, 2007) に動機づけられた向社会的行動である。逸脱行動の抑制という社会的行動が、結果的に学習関連発話を増加させ、グループでの理解や習得を促すという学業促進的な効果をもとことが示唆された。

Table 1 向社会的行動の学習逸脱行動抑制場面

<table>
<thead>
<tr>
<th>no</th>
<th>話者</th>
<th>発話内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>森田</td>
<td>えっと、僕</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>広井</td>
<td>(自分のプリントに何かを書き込んで、森田の話を聞こうとしていない。)</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>藤田</td>
<td>ちょっと。もう聞こう。もう聞こう。森田の。</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>森田</td>
<td>僕は、えっと、これを、上にあった三角形を下におろすと、长方形によって。</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>広井</td>
<td>無駄に、僕エッでけ</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>藤田</td>
<td>ちょっと待ってね</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>森田</td>
<td>だからここに 2 かけられないんじゃないって。</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>藤田 / 広井</td>
<td>平方！</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>森田</td>
<td>平方センチメートルになります。</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>藤田</td>
<td>立方って立方体のりつだからね。</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>広井</td>
<td>えっと、ぼくは。</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>森田</td>
<td>えっと、じゃあじゃあじゃあ、質問！</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>藤田</td>
<td>質問</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>広井</td>
<td>あ、そっか、質問はねー。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

本研究の一部は、平成 25 年度科学研究費助成金（奨励研究）課題番号 258906005 による支援を受ける。